



TITLE:

# 前漢邊郡都尉府の職掌と邊郡統治制度

AUTHOR(S):

野口, 優

---

CITATION:

野口, 優. 前漢邊郡都尉府の職掌と邊郡統治制度. 東洋史研究 2012, 71(1): 1-35

ISSUE DATE:

2012-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/198631>

RIGHT:

# 東洋史研究

第七十一卷 第一號 平成二十四年六月發行

## 前漢邊郡都尉府の職掌と邊郡統治制度

野 口 優

### はじめに

前漢後半期の西北邊郡は、防衛制度が確實に機能し匈奴を含めた異民族との大きな衝突もなく、非常に安定していた。ただし、同時期に漢帝國全土が安定していたわけではなく、西南邊郡は獲得した郡の放棄や大規模な叛亂など、成帝をして「西州隔絶し、幾んど郡と爲らず」（漢書『薛宣傳』）と嘆かせる状況となっていた。では、なぜ西北邊郡はこれほど安定していたのか。この安定の要因を一に匈奴との和平の成功に歸してよいのか。本稿の問題關心はここに存する。

考察する地域は、西北邊郡のうち、河西四郡、特に張掖郡居延・肩水兩地區とする。周知の通り、二〇世紀に漢代の居延・肩水地區に相當する現在の內蒙古自治區から行政文書を主とした多數の簡牘、すなわち居延漢簡が発見された。邊郡の中でも特に居延・肩水地區を考察するのは、一に出土史料が充實しているという理由にほかならない。

そして、考察する對象は部都尉を頂點とする都尉府の職掌とする。部都尉は、太守府のもと都尉府―候官―部燧で構成

される邊郡軍事機構中の都尉府の長官であり、居延・肩水地區には居延都尉と肩水都尉という二部都尉が駐屯していた。都尉府は、居延・肩水と遠隔の饒得縣に治所を置いた張掖太守府に代わり、居延・肩水各地區の最高防衛機關であつた。

部都尉及び都尉府に關して、それらを正面から取り扱つた研究はさほど多くない。居延漢簡を主に用いた邊郡都尉の專論として、陳夢家氏の研究及び市川任三氏の諸研究などが挙げられる。兩氏の研究では邊郡都尉の特殊性に言及するに止まり、具體的な部都尉の職掌まで考察が及んでいない（陳一九八〇／市川一九六五・一九六八）。さらに、兩氏が依據した當時の居延漢簡の釋文も出土地が判然としない上に、今日から考えれば誤謬の多いものであり、それに基づいた行論は必然的に危ういものとならざるを得ない。近年では、紀安諾氏が邊郡の都尉一般について研究している。參考になる點も多いが、紀氏の研究は邊郡都尉の種類・人數の解明に重きを置き、本稿のこれから行う考察とは方向性が異なる（紀二〇〇二）。

また、今日に至るまでの都尉に關する最も影響力の強い論考は、鎌田重雄氏と嚴耕望氏のものである（鎌田一九六二）。ただし、は、内郡地域・三輔地域・邊郡地域の三地域別に都尉の職掌を極めて詳細に論じたものである（鎌田一九六二）。ただし、鎌田氏は居延漢簡を全く取り扱わず文獻史料のみで考證を行っている。加えて邊郡都尉の職掌について多く後漢時代の西南邊郡に關する史料を用い考察している。前漢時代の西北邊郡においても、鎌田氏の考證の成果が適用できるかはなお検討が必要である。嚴氏も多少居延漢簡を用いているものの、ほぼ鎌田氏と見解を同じくする（嚴一九六二）。

さらに、邊郡統治制度に關する研究では、永田英正氏が居延漢簡を用いて邊郡統治制度に關する諸研究を批判・總合し、前漢邊郡の統治組織を明らかにした。しかし、氏の研究發表當時には、居延新簡はほとんど公表されていなかった上、都尉に關する知見の多くを前に述べたような史料的問題のある鎌田氏の研究に依據している（永田一九八九、四二一～四二三頁）。この點でなお永田氏の研究には再検討の餘地がある。本稿では、特に鎌田氏・嚴氏が提示した邊郡の地域差をあまり重視しない邊郡都尉像を克服し、居延・肩水地區の地域性を考慮した邊郡都尉像を提示することを通して、永田氏の研究を批判・發展させ、西北邊郡の統治制度の一端を解明したい。

なお、本稿で引用する居延新簡の圖版と釋文は、甘肅省文物考古研究所ほか編『居延新簡・甲渠候官』（中華書局、一九九四）を用いる。舊簡に關して、基本的に圖版は勞幹『居延漢簡圖版之部』（中央研究院歷史語言研究所、一九七七再刊）に、釋文は『居延漢簡釋文合校』（文物出版社、一九八七）に依據する。舊簡の場合、出土地も明記する。（破）が破城子で甲渠候官を、（大）が大灣で肩水都尉府を、（地）が地灣で肩水候官をそれぞれ表す。また、本稿で用いる居延新簡は全て甲渠候官出土簡である。

加えて、釋文で用いる記號は、 $\square$ が簡の斷裂、 $\square$ が釋讀不明の一字、……が釋讀・字數ともに不明の部分の意味する。

## 第一章 前漢居延・肩水地區都尉府の軍事的職掌

### 第一節 都尉府と兵器・鐵器管理

内郡・邊郡を問わず、都尉の基本的な職掌として、『漢書』百官公卿表上に、

郡尉は、秦官、守を佐け武職甲卒を典ることを掌る。秩比二千石。丞有り、秩皆な六百石。景帝中二（前一四八）年  
名を都尉に更む。

とある。つまり、都尉の基本的職掌は、太守を輔佐し軍務に従事する吏卒の管理統制にあった。この吏卒の管理統制には吏卒に支給されていた兵器の管理も含まれていた。肩水都尉府管轄下でも、

①戌卒 淮陽郡城父 $\square$ 上里陳廣年 六石具弩一

稟矢五十

七・二四（地）

②戌卒 昌邑國西郁西土里朱廣德 假有方一完

五二・二四（大）

という簡が出土している。簡①、②では、通常の名籍の書式の下部に兵器の數量や狀態が記されている。このような書式

の簡牘は、都尉府・候官を問わず居延・肩水から多數出土している。つまり、都尉府を含めた軍事機構全體は、吏卒だけでなく吏卒の兵器管理をも基本的な職掌の一つとしていたことを意味している。

そして、居延・肩水兩地區には、軍事機構の他に農都尉に屬する屯田を管掌する諸機關が存在した。從來の諸研究に基づき、都尉府以下の軍事・農政機構の系統圖を以下に示す。<sup>(1)</sup> 括弧内は當該機關の長官である。

【軍事系統】 部都尉府（部都尉）——候官（都候）——部（候長）——燧（燧長）

【農政系統】 農都尉府（農都尉）——部農（農令）——分部（長・丞）

圖のように、軍事系統の諸機關と農政系統の諸機關は、部都尉府と農都尉府、候官と部農、部と分部が對應關係にある。なお、居延地區の部農は居延農、肩水地區の部農は驛馬農と呼ばれていた。

ここで再度兵器管理の話に戻ると、都尉府は候官と違い直接の統屬關係にない農政機關の兵器管理にも關與していたと思しい。肩水都尉府出土簡には、たとえば、

③ 第二承官七月兵簿

一一〇・三一（大）

④ 第四長官七月兵簿

五二・一一（大）

という簡がある。簡③、④には、發信機關が記されていないが、軍事系統の候官に相當する部農の一つである驛馬農が下部機關の分部の狀況を整理して都尉府に冊書の形式で送達した際の表題簡であろう。これらの簡から、都尉府が自身の系列下になく機關の兵器簿を管理していたことは明らかである。さらに、都尉府は自身の管轄下になく農政機關に對して、定期的に兵器のみならず、鐵製農具の數量も都尉府に報告させていた。

⑤ 斧二——盾六——

三〇三・一六（大）

【斧二つ 検査済み。盾六つ 検査済み。】

この簡のように、農政機關の兵器・農具の數量は都尉府が保持している帳簿と照合され、常に都尉府による監査を受けて

いたのである。もし、都尉府の保持している帳簿と農政機關提出の帳簿の數量が食い違えば、肩水候官出土の簡である、

⑥校候三月盡六月折傷兵簿、出六石弩弓廿四、附庫。庫受。齋夫久廿三。而空出一弓。解何。 一七九・六(地)

【候官の三月から六月までの折傷兵簿を點検すると、六石弩二四個を出して、庫に渡したとある。庫は受領。齋夫の久が三個受け取ったとある。出した一個の弓を缺いている。どういふことか。】

などのように、都尉府から農政機關に説明を求める文書が送られたと思われる。すなわち、都尉府は兵器・鐵製農具に關する簿籍を都尉府に提出させることによって、農政機關の兵器・鐵製農具の所有狀況を把握し、管理していたのである。

では、なぜ邊郡の都尉府が農政機關の兵器・鐵製農具の所有狀況まで監査していたのであろうか。もちろん都尉本來の職掌の延長線上に兵器管理が存在していたことも理由の一つではあろうが、嚴密には農政機關の吏卒は都尉府の系列下にないため、都尉府が管理統制すべき「武職甲卒」とは定義しえなからう。そこで想起すべきことは居延・肩水地區が異民族と境を接する地域であることである。異民族に兵器や鐵が流失することは嚴に戒められており、平和裏の交易の場ですえ兵器や鐵を境界外に持ち出すことが警戒されていた。このことは、『漢書』汲黯傳の應劭注に、「胡市、吏民の兵器及び鐵を持ちて出關するを得ず」<sup>(2)</sup>とあることから了解される。もちろん、交易だけでなく通常時も兵器の關外持ち出しが禁止されていたはずで、不正に持ち出した者は勿論、故意に見逃がしたかもしくは見落とした官吏もまた處罰された<sup>(3)</sup>と思われる。たとえば、財物が關外に不正に持ち出された際、官吏が處罰されたことは漢初の法律である二年律令の盜律に、

盜出財物于邊關徼、及吏部主智而出、皆與盜同法。弗智、罰金四兩。使者所以出、必有符致、毋符致、盜律七四  
吏智而出之、亦與盜同法。 盜律七五

【不正に財物を邊境の關所や境界から出したとき、及び所轄・擔當の官吏がそれを知つてて出させたときは、いずれも盜と法を同じくする。知らなかったときは、罰金四兩。使者が越境するためには、必ず符致が要るが、符致がなく、吏がそれを知つていながら越境させたときも、また盜と法を同じくする。<sup>(3)</sup>】

とあることから断言できよう。<sup>(4)</sup>

つまり、邊境において兵器に限らない財物の管理は吏に重大な責任があった。都尉府が自身の統屬下でない農政機關の兵器・鐵製農具の簿籍を管理していたことは、それがもともと都尉の職掌のみならず、何より兵器及び鐵の關外流失を防ぐという理由に、その原因が求められる。すなわち、都尉府は兵器・鐵製農具の管理という點では、通常では直接の管理統制を行い得ない他系統である農政機關の簿籍をも取り寄せ、それらの所有狀況を常に監視することができたのである。

## 第二節 都尉府と人民管理

肩水都尉府からは、農政機關所屬の卒である田卒の名籍も多數出土している。例えば、

⑦田卒 濟陰郡定陶西陽里胡定年廿五

五二〇・三(大)

などがある。簡⑦のような名籍の種類の一つに、居延・肩水地區の部農の長から都尉府に送られる田卒名籍が擧げられる。肩水地區の驛馬農から送られてきた文書として、

⑧元鳳元年十一月己巳朔乙未、驛馬農令宜王・丞

安世敢言之。謹速移卒名籍一編。敢言之。

一九・三四(大)

がある。この「卒」が田卒であることは言を俟たない。

では、なぜ直接の統屬下ないとされる農政機關の田卒の名籍が都尉府の府から出土するのであろうか。都尉府の軍事的職掌の一つに、侵入してくる異民族から自身の管轄區域に居住する吏民を防衛することが擧げられる。居延漢簡にも、

⑨本始元年九月庚子、虜可九十騎入甲渠止北燧、略得卒一人、盜取官三石弩一・橐矢十二・牛一・衣物去。城司馬宜昌將騎百八十二人、從都尉追。

五七・二九(破)

【本始元(前七三)年九月二日、虜が九〇騎ばかりで甲渠止北燧に侵入し、卒一人を略奪し、官の三石弩一・長矢二一・牛一・衣

物を盗んで去っていた。城司馬の宜昌は騎兵一八二人を率い、都尉に従い追跡した。】

とあるように、都尉は直接部隊を指揮し防衛にあたっていた。糞山明氏は居延都尉府からの下行文書と思しい、

⑩ 承事、謂庫・城倉・居延・居延農・延水・卅井・甲渠・殄北塞候、寫移書到令□

□□□□書如律令。／掾仁・守卒史□卿・從事佐忠。

EPT五一・四〇

【……丞の職務を代行して、庫・城倉・居延（縣）・居延農・延水・卅井（候官）・甲渠（候官）・殄北（候官）塞候に謂う。書き寫して送られてきた文書が届いたら……書如律令。／掾の仁・卒史心得の□卿・從事佐の忠】

を根據に、地域全體の防衛に責任を負うため、居延都尉には大きな権限が與えられており、縣や田官など自己の系統下  
にない官署にも命令を下すことができたとする（糞山二〇〇二）。肩水地區でも状況は同様であろう。<sup>(5)</sup>

しかし、注意しなくてはならないことは、都尉府にはさらに長城内の吏民が長城外に逃亡することを防止する職務が課  
せられていたことである。都尉府が吏民の逃亡防止に關して常に注意を拂っていたことは以下の簡からも明瞭であろう。

⑪ 馬長吏、即有吏・卒・民・屯士亡者、具署郡縣里・名姓・年・長・物色・所衣服齋操・初亡年月日・人數、白

報與病已。●謹案、居延始元二年戌田卒千五百人、爲驛馬田官穿涇渠。迺正月己酉淮陽郡

三〇三・一五、五〇三・一七（大）

【驛】馬の長吏……、もし吏・卒・民・屯士に逃亡する者があれば、具さに郡縣里・姓名・年・身長・容貌・服裝や所持品・初めて  
逃亡した年月日・人數を署し、病已（人名）まで報告せよ。●謹んで調べましたところ、居延の始元二（前八五）年度の戌田卒は

一五〇〇人で、驛馬田官のために用水路を掘削しております。前の正月八日に淮陽郡……】

以上のように、少なくとも軍事防衛・警察の職務の範圍内であれば、都尉府は農政機關にも命令を下すことができたの  
である。簡⑪は昭帝期のものであるが、都尉府は前漢後半期を通して常に吏卒の逃亡を警戒していた。というのも『漢  
書』匈奴傳下に、邊境狀勢に精通した郎中の侯應による、



塞徼を設け、屯戍を置く、獨り匈奴の爲めのみに非ず、亦た諸屬國の降民、本と故の匈奴の人、其の舊きを思いて逃亡するを恐れる爲め、四なり。……又た邊人の奴婢愁苦し、亡ぐるを欲する者多く、曰く、匈奴の中の樂なるを聞くも、候望の急なるを奈何ともする無しと。然れども時に亡げて塞を出る者有り、七なり。盜賊桀黠にして、羣輩法を犯し、如し其の窘急にして、亡げ走りて北に出づれば、則ち制すべからず、八なり。……

という上奏がある。この上奏は、漢との和平を達成した呼韓邪單于が、自身の宿敵であつた郅支單于敗滅の後、敦煌以東の邊境防衛を漢に代わつて擔當し、漢の戍卒の負擔を減らしたいと申し出たことを承けてなされたものである。侯應の上奏を承け、元帝は鄭重に呼韓邪單于の申し入れを謝絶している。漢が邊郡狀勢の安定後も西北邊郡に軍事機構を存續させ續けたのは、異民族への警戒のためだけでなく内地の居民が塞外へ逃亡することを警戒していたためでもある。このことはすでに指摘されてきたように明瞭であらう。<sup>(6)</sup>

總括すると、都尉府は單に自身の管轄區域を防衛するのみならず、區域内の吏卒の逃亡を監視することをも職掌の一つにしており、この職掌に關することならば、自身の統屬下にない農政機關などの他機關にも命令を下すことができる權限を有していたのである。

### 第三節 都尉府と太守府

都尉の軍事の權限についてまず參照されるべきは、鎌田重雄氏と嚴耕望氏の研究であらう。鎌田氏は内郡都尉を例に挙げ、一般に都尉には獨自行使しうる軍事權がなく一郡の軍事權は全て太守に委ねられており、都尉は太守の軍事上の副將に過ぎないとする。ただし、都尉は常時一郡の武職・甲卒を掌ることによつて太守を補佐していたことから、太守と都尉の兩者の地位には大きな懸隔がなく都尉は太守の專制を抑制する役割を擔つていたと論ずる（鎌田一九六二、三〇七―三〇八頁）。そして、嚴氏は鎌田氏とほぼ見解を同じくするが、邊郡では太守は強力な軍事力をもつ都尉を完全には制御で

きなかつたとする（嚴一九六一、一五八頁）。

まず、邊郡太守の軍事に對する權限としては、『續漢書』百官志所引『漢官儀』に、

邊郡太守 各おの萬騎を將い、障塞・烽火を行り、虜を追う。長史一人・丞一人を置き、兵・民を治む。兵行に當りては長領す。部尉・千人・司馬・候・農都尉を置き、皆な民を治めず、衛士を給さず。

とあり、太守が強力な兵力を擁して大きな權限を有していたことが記されている。また、肩水候官出土の檄にも、

⑫得、倉丞吉兼行丞事、敢告部都尉卒人。詔書清塞下、謹候望、備蓬火、虜即入、料度可備中、毋遠追爲虜所詐、書已前下、檄到、卒人遣尉・丞・司馬數循行嚴兵□  
一一・一 A（地）

⑬□禁止行者、便戰鬪具、驅逐田牧畜產、毋令居部界中、警備毋爲虜所誑利、且課毋狀不憂者、効尉・丞以下。毋忽。如法律令。敢告卒人。／掾延年・書佐光・給事□  
一一・一 B（地）

【……得、倉丞の吉兼ねて丞事を代行し、部都尉殿にお傳える。詔書には塞の安寧をはかり、候望を嚴肅にし、蓬火を準備し、虜がもし侵入すれば、内部の防備を考慮して、深追いして虜に騙されることの無いようにせよとある。書はすでに下された、檄を受け取つたら、貴殿は尉・丞・司馬を派遣して、しばしば巡視して武器を整え、】

【……通行を禁止して、戰鬪の具をすぐに使えるようにして、農作物・牧畜を移動させて、部界中に留め置かず、警備して虜に誑かされることの無いようにし、さらに職務不届きで憂慮しない者を検査して、尉・丞以下を告發せよ。毋忽。如法律令。部都尉殿にお傳える。掾の延年、書佐の光、給事の□】

とある。富谷至氏が指摘するように、この檄は、張掖太守府から肩水都尉府に送られた警備關係の檄を、都尉府が肩水候官宛に別の檄に書き寫して送附し、さらにそれを候官から所轄の部に送つたものである（富谷二〇一〇、五九頁）。つまり、警備に關する命令も太守府より發せられていたのである。上記の典籍・出土史料より見ても、前漢後半期には邊郡でも基本的に内郡と同様に太守が軍事權を掌握していたと斷じてよからう。

さて、次に考察すべき問題として、匈奴・羌という二つの強力な異民族の居住地を分断する形に領域を有する張掖郡が異民族からの攻撃を受けた際、居延・肩水兩部都尉にはどのような役割が割り振られていたかということである。結論から言って、居延・肩水兩部都尉の役割は自身の管轄区内の防衛に専念することであつたと思われる。

なぜなら、兩都尉府の管轄區域、特に居延のオアシス地域は、松田壽男氏が論ずるように、ただ單に大きく肥沃なオアシスであつただけでなく、河西と天山方面とを結ぶ東西及びゴビ方面と甘肅を結ぶ南北の兩交通路が交叉する十字點であつたためである（松田一九八七、六三頁）。つまり、兩部都尉は交通の要衝に駐屯していたため、異民族の侵入に對して常に防備を怠ることが出来なかつたのである。また、『漢書』趙充國傳に、

又た武威の縣・張掖の日勒皆な北塞に當たり、通谷水草有り。臣匈奴・羌と謀有りて、且に大いに入らんと欲するを恐る。幸いに能く張掖・酒泉を要り杜<sup>さへぎ</sup>ぎ、以て西域を絶たば、其の郡兵尤も發すべからず。

と、武威郡の諸縣及び張掖郡の日勒縣の地勢の重要性が述べられており、輕々しく兵を發するべきでないとされている。當然、匈奴の侵入路の最前線に位置する居延・肩水地域にもこれがそのまま適用されることは容易に首肯されよう。

従つて、基本的に異民族の侵入が起きた際、戰略的要地に位置する兩部都尉は自身の管轄區域の防衛のみに専心していたことになる。部都尉の最重要的の軍事的職掌は自身の管區を平穩な狀態にしておくことだったのである。

このように、部都尉は自身の管轄區を確實に防衛することが重要な職掌であつた。そのため、前節で觸れたように、部都尉は、軍事・警察關係についての事柄であるならば、自身の系統下でない農政機關・縣などにも命令を下し得る程の強い權限を有していた。しかし、本節で考察したように、部都尉は常に太守の監督下に置かれていたのである。

最後に、邊郡の都尉と太守の關係について總括しておこう。確かに一郡一都尉制を布く内郡に限つては、鎌田氏の見解は首肯できる。しかしながら、邊郡では、張掖郡の居延・肩水都尉のように都尉が複数存在していた。<sup>(7)</sup>では、都尉が一郡に複数存在する邊郡での都尉と太守の關係は如何なるものか。邊郡では太守の方が部都尉よりも遙に多くの兵數を有し、<sup>(8)</sup>

この點で都尉が内郡のように一郡の軍吏・兵卒を全て掌握しているわけではない。さらに、都尉が複数いることで軍吏・兵卒の掌握という都尉の最も基本的な軍事的職掌は各都尉間で分割され、必然的に都尉の權限の弱體・縮小化をもたらす。つまり、太守の專制を押さえる都尉の役割が内郡と違い邊郡では全く機能しないのである。すなわち嚴氏の考察とは異なり、前漢後半期の邊郡では内郡と違い太守の方が都尉よりも遙に強い權限を有すると結論づけることができる。

## 第二章 前漢居延・肩水地區都尉府の行政的職掌

### 第一節 都尉府と文書行政

富谷氏によれば、漢代の文書行政とは、官署間で官吏が文書により命令・報告などの情報を傳達する行政のことである。睡虎地秦律の内史雜に、

有事請毆（也）、必以書、毋口請、毋羈（羈）請。

内史雜二五五<sup>(9)</sup>

【政務においては、文書でおこなう。口頭での申請、代理人の申請は認めない。内史雜律】

とあり、この文書貫徹主義は漢代においても同様であったとする（富谷二〇一〇、二三〇頁）。この文書行政における都尉府の職掌には、當然自身の管轄區の文書を太守府に上申することが含まれる。例えば、肩水都尉府出土簡に、

⑭本始三年八月戊寅朔癸巳、張掖肩水都尉□

受奉賦名籍一編、敢言之。

五一・四〇（大）

とある。上行文書の形式をもち、發信者が肩水都尉となっていることから、都尉府から太守府あての文書の控えて間違いない。ただし、都尉府出土簡は数が少ない上、居延都尉府が未だ發掘調査されていないため、ここでは候官出土の簡牘から候官と都尉府の關係を中心とした都尉府の文書行政における職掌を考察する。

行政文書を作成する最末端機関である候官（永田一九八九、四〇〇頁）と候官の上級機関である都尉府の文書の遣り取りの内、都尉府の重要な職務の一つに候官から送付されてきた文書の内容の点検が挙げられる。もし、候官から送られてきた文書の内容に矛盾點が存在すれば、

⑮校甲渠候移正月盡三月四時吏名籍、第十二燧長張宣史。案府籍、宣不史。不相應。解何。

一二九・一二一、一九〇・三〇（破）

【甲渠候が送ってきた正月から三月までの四時吏名籍を調べると、第十二燧長の張宣が「史」となっている。（都尉）府の名籍を調べると、宣は「不史」となっている。一致していない。どういうことか。】

などのように、候官に説明を求めることになる。この簡から、都尉府には軍事機構で勤務する吏の名籍の原簿が存在していたことがわかる。候官から送られてきた名籍を都尉府が保持する原簿と比較して点検したのであろう。また、都尉府には名籍に限らず、候官から送られてくる文書の内容の点検に必要な簿籍の原簿が保管されていたと思われる。このことは、

⑯吞遠候長王恭持兵簿、詣官。校。

EPT四三・七〇

【吞遠候長の王恭 兵簿を持参して、候官に到る。検査済み。】

のように、吏が持参してきた様々な簿籍が赴いた先の上級機関で保管されている原簿と照合されたことから伺えよう。

また、次に挙げる簡は、郵書傳達の遅配のため都尉府から候官に宛てた舉書に對して、候官がさらに各部に郵送状況を調査させ、部から候官へ送った調査結果の回答文書である。

⑰建昭四年四月辛巳朔庚戌、不侵候長齊敢言之。官移府所移郵書課舉曰、各推辟部中、牒別言。會月廿七日●謹推辟案過書刺、正月乙亥人定七分不侵卒武受萬年卒蓋。夜大半三分付當曲卒山。鷄鳴五分付居延收降亭卒世。

EPT五二・八三

【建昭四（前三五）年四月三〇日、不侵候長の齊が申し上げます。候官から送られてきた（都尉）府からの郵書課舉に、各自部中を

調査し、簡牘別に報告せよ。期限は今月二七日までとすると述べられております。●謹んで調査し過書刺を調べましたところ、正月乙亥の日の人定七分に不侵卒の武が萬年卒の蓋より受け取りました。夜大半三分に當曲卒の山に渡しました。鶏鳴五分に居延收降亭卒の世に渡しました。<sup>(11)</sup>

この簡で注目すべきことは、都尉府は舉書を候官に送るだけで、都尉府自身が部燧に命令を下していないことである。部に直接指令を出して、部より送達された文書を集約しているのは候官なのである。

次の簡は、都尉府の吏による長城の視察（「行塞」）を受け、候官より部に発信された「候史廣德坐罪行罰檄」である。<sup>(12)</sup>

⑬候史廣德坐不循行部、涂亭、趣具諸當所具者、各如府都吏舉。部繡不畢、又省官檄書不會會日。督五十。

EPT五七・一〇八A

【候史の廣德は部を巡回せず、亭燧の壁を塗らず、當然備え附けておくべき物品を速やかに備え附けておかなかった罪に坐す。それぞれ（都尉）府の吏の舉の通り。部の備品は不十分で、加えて候官の檄書の報告期限にも間に合わなかった。杖五十回。】

この簡の裏面には、第十三燧から第十八燧までの守御器と呼ばれる防衛關係の備品の設備不備が列舉されている。こうした文書を行塞舉という。都尉府の吏は確かに部燧を視察し、こうした行塞舉を候官に送付している。しかし、この行塞舉の内容は主に燧の整備不良や守御器の不備の指摘のみに限られている。注意すべきことは、簡⑬中に、「部繡不畢、又省官檄書不會會日。督五十」とあることから、候史廣德に罰を實際に執行しているのは候官であって都尉府ではないことである。つまり、都尉府は各燧の状況を直々に視察するが、その結果を承けて官吏に處罰を執行するのは候官の職務なのである。このほか、候官以下の吏に處分を下す役割が候官にあったことを示す簡牘としては、

⑭十一月郵書留遲不中程、各如牒。晏等知郵書數留遲。爲府職不身拘校而委

任小吏、忘爲中程。甚毋狀。方議罰。檄到、各相與邸校、定吏當坐者言。須行法。

五五・一一、一三七・六、一二四・三十五・一三、一二四・一四、一二四・一五（破）

【一二月の郵書が遅配し規定通りではなかったこと、各々簡牘の通り。晏らは郵書がしばしば遅配されていたことを知っていた。（都尉）府の職に就いているのに自ら點檢せず小役人に委任し、妄りに規定通りとした。非常に不届きである。これから罰を議す。檄が到着すれば、各自調査するとともに、吏の當然罪すべき者を確定し報告せよ。（供述の確定を）待ちて法に照らして處罰せよ。<sup>(13)</sup>】

がある。都尉府は處罰すべき吏の確定報告を受けるのみで實際に吏に處分を下すのは候官であることが了解されよう。<sup>(14)</sup>

このように、都尉府は少なくとも候官に部以下の文書の集約と候官以下の吏への處分の執行を委任していたといえよう。では、その他の行政業務に關する都尉府と候官の關係は如何なるものであろうか。節を改めて検討しよう。

## 第二節 都尉府と候官

この節では、都尉府と候官の行政上の職掌分擔として、借財の回收、官吏の任免等を組上に載せ、最終的に都尉府が文書行政の體制下で果たした役割の一端を明らかにする。

まず、糒山氏は肩水都尉府址から出土した簡牘である、

②〇元延元年十月甲午朔戊午、橐他守候護移肩水城。官吏自言、責嗇夫瑩晏、如牒。書到、

驗問收責報、如律令。

五〇六・九A（大）

【元延元（前一二）年一〇月二五日、橐他候心得の護が肩水都尉府に送る。候官の吏が自言するに、嗇夫の瑩晏に債務を請求すること、簡牘の通り。文書が到着すれば、取り調べて債務を回收し報告していただきたい。如律令。】

を根據として、都尉府が貸財の回收に關與していたとする（糒山二〇〇六、二〇七頁）。ただし、糒山氏は、都尉府が貸財の回收に關して如何なる役割を擔ったかについて明言していない。貸財回收における都尉府の對應を考える上で重要な手掛かりとなるのが以下の簡牘である。

②1 收責報。會月十日。謹以府書驗子都名親。辭 故居延令史喬子功。

三・二(破)

【債務を回収し報告せよ。期限は今月一〇日まで。謹んで府書を以て子都(字?) 本名親を取り調べました。供述では、……故の居延令史の喬子功。】

②2 二年二月丁酉朔丁卯、甲渠鄯候護、敢言之。府書曰、治渠卒價

□□自言、責燧長孫宗等衣物錢、凡八牒、直錢五千一百。謹收得。

EPT五二・一一〇

【……□□二年二月三〇日、甲渠鄯候護が申し上げます。府書には治渠卒の價□……が自言するに、燧長孫宗等に衣物の錢を求めており、合わせて簡牘八枚で、値段は錢五一〇〇とあります。謹んで回収いたしました。】

簡②1、②2から、都尉府は候官に貸財の回収を命令するだけで、実際には候官が回収を擔當したことが了解されよう。都尉府は貸財の回収においても候官以下の吏卒に直接的に接觸することはないのである。

續いて、都尉府の候官以下の吏の任免に關する權限を取り上げる。永田氏が論ずるように、候官以下の少吏の任免權は都尉府に存在した(永田一九八九、五〇三～五〇六頁)。氏の論は、後に公開された居延新簡中の、

②3 □□言之。府記曰、斥免燧長□□

EPF二二・五一五

【……申し上げます。(都尉) 府記に言うことには、燧長□を罷免する……】

②4 府記曰、遣新占男子劉遷、代燧長□

EPF二二・六四八

【(都尉) 府記に言うことには、新たに戸籍に登録された男子の劉遷を派遣し、燧長……と交代して……】

などに徴しても妥當な見解といえよう。角谷常子氏は、永田氏の見解をさらに敷衍し、都尉府に吏の任免そして配置轉換に關する全ての決定權があつたとする(角谷一九九三)。ただし、永田・角谷兩氏が述べるように、都尉府が全ての人事を獨自に決定するわけではなく、候官の作成する人事の判定資料に則って人事異動を發令していた(永田一九八九、五〇七頁／角谷一九九三)。該當史料を居延新簡より擧げると、



●甲渠言、尉史陽貧困不田、數病。

欲補燧長、宜可聽。

E P F 二二・三二七

【●甲渠（候官）が言う、尉史の陽は貧困にして耕作せず、數しば病氣になる。燧長に任命して頂きたく、お聞き入れ頂きたい。】

●甲渠言、鉾庭士吏李奉、燧長陳安國等、年老病、請斥免。言府。●一事集封

E P T 五一・三一九

【●甲渠（候官）が言う、鉾庭士吏の李奉、燧長の陳安國ら、高齢で病氣があり、罷免するを願う。府に報告する。●一事集封……】

などが挙げられる。候官以下の吏の任免に關して、候官は都尉府に人事決定の進言を行っていたことが了解されよう。

さらに、訴訟に關しても、靺山氏は都尉府に提訴された事案で、都尉府が最終的な決定權を有するものの、候官に案件を下げ渡し、候官に案件の審理と判決のための原案作成を委ねていたと論ずる（靺山二〇六、一四八―一四九頁）。

そこで、文書行政における都尉府と候官の關係を總括するならば、都尉府は、候官以下の吏卒に關係する行政の事務の多くを候官に委任しており、主に部燧の整備状況や守御器關係の査察が中心である行塞を除けば、多くの場合、文書の中でしか候官以下の機關や吏卒の情報を知り得なかった。すなわち、候官こそが候官と候官以下の機關や吏卒に關する行政の實務を擔つたのである。このことは、邊郡の都尉府と候官の關係に相當する内郡の太守府と縣においても同様で、太守府は縣以下の吏民に關する行政事務の多くを縣に委任し、結果を太守府に文書で報告させるだけであつたのではないか。たとえば、前漢後半期において内郡でも太守府が縣の吏民に對して直接處罰を下さなかつたことは、『漢書』薛宣傳に、

宣郡中の吏民の罪名を得、輒ち召して其の縣の長吏に告げ、自ら行罰せしむ。曉して曰く、府の自ら舉を發せざる所以の者は、縣の治に代わり、賢令長の名を奪ふことを欲せざればなり。

とあり、邊郡の居延の事例と完全に一致することからも首肯されよう。<sup>(16)</sup> だからこそ、武帝期以後の郡國における下級機關から上級機關への報告の風潮として、『漢書』貢禹傳に、

郡國の其の誅に伏するを恐れ、則ち史書に便巧にして、計簿に習い、能く上府を欺く者を選び、以て右職と爲す。

とあるような、上申する文書の内容に不正が起こりうる餘地があるのである。<sup>(17)</sup> 上級機關が下級機關から文書を受領するだけにとどまらず、實際に行政事務を直接管掌していれば、このように文書の不正を行ひ上級官府を欺くことができるような官吏が重用される風潮が存在したとは考え難い。<sup>(18)</sup> 本節での考察と貢禹傳の記述からも、前漢後半期には、上級機關である内郡太守府と邊郡都尉府が下級機關である内郡の縣と邊郡の候官にそれぞれ行政事務の實務の多くを委任し、文書によつて結果を報告させていたといえよう。上級機關が下級機關に多くの實務を處理させるのは、内郡・邊郡を問わず前漢後半期の「政務分擔の慣行」であつた。<sup>(19)</sup> 上申される文書の不正については、『漢書』宣帝紀にも、

方今 天下に事少なく、繇役省減して、兵革動かず、而れども民多く貧しく、盜賊止まず、其咎 安くにか在らん。  
上計簿、文を具えるのみ、務めて欺謾を爲し、以て其の課を避く。

とあり、前漢後半期の上計簿の不正について描かれている。永田氏は文書點檢の嚴密性から、『漢書』宣帝紀及び貢禹傳の記載を額面通りに解釋することに懷疑的である（永田一九八九、三九九頁）が、都尉府が候官に行政事務の多くを委任し、行塞という例外を除けばほぼ文書でしか状況を把握していないことから考えれば、この『漢書』に描かれた文書の不正の問題は、必然的に起こりうる蓋然性が高く、その意味では事實を如實に表現した記述と評價し得よう。<sup>(20)</sup>

このように文書行政の發達は、多くの研究者が述べるように漢帝國を長期にわたつて維持させた。しかしながら、他方で上級機關が下級機關に行政事務を委任する文書行政の形式は、下級機關より送付されてきた文書を點檢する以外に、下級機關の事務を容易に把握することを困難たらしめたともいえよう。このことから、候官が候官と候官以下の吏卒を統轄する中心機關であるのに比べ、第一章・第二章の考察により、邊郡都尉府は邊境狀態の安定を維持し續けるため、より軍事・警察業務に専念していた機關であることが了解されよう。都尉府が軍事・警察業務に關して他機關にも命令を下せる程の權限を有していたにも拘わらず、候官が多くの行政實務を處理・執行していたことは、邊郡統治に如何なる影響を與

えたのか。次にこの點を考察しよう。

### 第三章 前漢邊郡統治制度

#### 第一節 都尉府と縣

部都尉と邊郡統治の關係については鎌田氏の先驅的な研究が存在する。鎌田氏は、主に後漢時代の帝國西南邊郡下の異民族に對する統治政策についての史料を用いて、部都尉は漢の郡政下に新しく入った異民族居住地域に置かれ、數縣を領して治民と軍事の兩方面を管掌し、或いは異民族の懷柔につとめ、或いはその叛亂・侵寇を防禦するものであったとする（鎌田一九六二、三一八―三二九頁<sup>(21)</sup>）。ただし、前漢時代の河西地方の邊郡の居住者の多くは、『漢書』地理志下に、

武威より以西、本と匈奴昆邪王・休屠王の地、武帝の時之を攘い、初めて四郡を置き、以て西域に通じ、南羌・匈奴を隔絶す。其の民或いは關東の下貧を以て、或いは怨みに報いるに當を過ぐるを以て、或いは諍逆亡道を以て、家屬徙さる。

とあるように、關東の貧民や過激な復讐者や諍逆亡道の者とその家族で構成されていた。そして、張掖郡には漢に歸屬した異民族で構成される屬國が存在した。肖化氏によれば、張掖郡の屬國は郡南部の黑河上流地域にあたる祁連山北嶺に位置し（肖化一九八三<sup>(22)</sup>）、「張掖屬國精兵萬騎」（『後漢書』竇融傳）という強大な兵數を誇っていた。強大な兵數とはつまり多くの人口を抱えているということを意味する。このことから、歸屬した異民族の大部分は張掖郡の南部に位置する屬國に配置されていたと考えられるため、やはり居延地域には漢人が中心となって居住していたとするほうが適切であろう。典籍史料から、部都尉が異民族の多く居住する地域に駐在していたという鎌田氏の論は、少なくとも前漢後半期の河西地方の居延・肩水兩地區には成り立ち難い。

では、次に部都尉が數縣を領して治民と軍事の兩方面を管轄していたとする鎌田氏の説が前漢居延地域にもそのまま適用できるのか、縣と都尉府を中心とする軍事機構で往來した文書の分析を通して考察しよう。

まず、都尉府が縣を領したかについて、宣・元・成帝期のいずれかの時期のものと思しい、

②⑦十二月乙丑、張掖大守延年・長史長壽・丞焚、下居延都尉・縣。承書從事、下當用者。如詔

書律令。／掾段昌・卒史利・助府佐賢世。

EPT五二・九六

という簡がある。<sup>(24)</sup>明らかに太守府が都尉及び縣に命令を下しており、都尉府が何の掣肘を加えられることなく、縣を自身の統屬下に置いていたとは判断できない。また、居延漢簡には太守府が都尉府・縣雙方に命令を下している文書が他にも出土しているため、<sup>(25)</sup>前漢後半期に都尉府が縣を無條件に自身の統率下に置いていたとは考えにくい。

次に、前漢時代の都尉府と治民の實態を都尉府と縣の行政上の關係を通して考察しよう。居延新簡には軍事機構の人事任免に縣が關與したことを明示する冊書が存在する。居延縣から甲渠候官に送達された「居延令移甲渠吏遷補牒」と呼ばれる五枚の簡牘からなる冊書である。

②⑧牒書。吏遷斥免、給事補者四人、人一牒。

建武五年八月甲辰朔丙午、居延令 丞審、告尉謂鄉、移甲渠候官、聽書從事。如律令。

EPF二二・五六A

②⑨甲渠候官尉史鄭駿 遷缺

EPF二二・五七

③⑩故史陽里上造梁普年五十 今除補甲渠候官尉史 代鄭駿

EPF二二・五八

③⑪甲渠候官斗食令史孫良 遷缺

EPF二二・五九

③⑫宜穀亭長孤山里大夫孫況年五十七 薰事 今除補甲渠候官斗令史 代孫良

EPF二二・六〇

この冊書の性格については、縣による軍事機構の人事異動・配置轉換の最終決定（角谷一九九三）、原案作成に過ぎない（佐原一九九七）などと、解釋が分かれるが、何らかの形で縣が軍事機構の人事任免に關與していることは疑いない。

また、軍事機構と縣の關係については、訴訟・裁判の案件も擧げられる。たとえば、肩水・甲渠候官よりそれぞれ、

③③ 元康二年六月戊戌朔戊戌、肩水候長長生以私印

行候事、寫移昭武獄。如律令。

二〇・一一（地）

【元康二（前六四）年六月一日、肩水候長の長生は私印を以て候の事務を代行し、昭武（縣）獄に書き寫して送る。如律令。】

③④ 正月丁未、甲溝鄣守候君、寫移閒田獄。如律令。

九五・四（破）

【正月丁未、甲溝（＝甲渠）候心得殿が、閒田（＝居延）獄に書き寫して送る。如律令。】

などの簡牘が出土しており、縣に裁判を依頼する場合、候官から縣に依頼されているのである。<sup>(26)</sup>佐原氏が述べるように、都尉府には候官から報告が行くのであるが（佐原一九九七）、縣と直接連絡を取るのは、都尉府ではなく候官の役割であったと思われる。このように、軍事機構は行政において縣に協力を仰ぐ事例も確實に存在する。

さて、ここで縣と軍事機構の文書傳達において興味深い簡が存在する。肩水候官より出土した、

③⑤ 九月乙亥、饒得令延年・丞置敢言之。肩水都尉府移肩水候官、告尉謂東西南北都

九七・一〇、一二三・一（地）

義等補肩水尉史・燧長・亭長・關佐、各如牒。（以下略）

【九月乙亥、饒得令延年・丞置が申し上げます。肩水都尉府が肩水候官に送り、（肩水候官が）尉を通して東西南北都……に報告なされました。……義らを肩水尉史・燧長・亭長・關佐に補充いたすこと、別冊の通りです。（以下略）】<sup>(27)</sup>

という簡牘である。簡③⑤は正確な年代こそ不明なものの、前漢後半期の簡牘である可能性が極めて高い。ここで、「移」・「告」・「謂」という文書の送達に關する動詞に注目しよう。これについては、従來大庭脩氏の解釋が定説とされてきた。

大庭氏は、同格者に對して文書を送達する場合には「移」を用いるとし、「告」も「謂」も自身より格下の者に文書を送る際に用いられる動詞だが、命令者と官職の近い者には「告」を、差の大きな者には「謂」を用いるとする（大庭一九七九、一五七頁）。大庭氏の說で重要な點は、「移」・「告」・「謂」の差を設けることによって、複數機關に一齊に文書を送達

しているという点にある。この大庭説に對して竺沙雅章氏が反論を提出している。竺沙氏は特に「告甲謂乙」という書式に注目し、複數機關に一齊に文書を送達したわけではなく、「甲に告げて乙に謂う」つまり「甲を通して乙に通達する」という甲から乙への傳達を指すとする（竺沙二〇〇三、三四四―三四六頁）。

そこで、改めて候官出土簡の「告尉謂」<sup>(27)</sup>という書式に注目すると、

③⑥ 五月癸巳、甲渠鄣候喜、告尉、謂第七部士吏・候長等、寫移檄到、士吏・候長・候史循行

一五九・一七、二八三・四六（破）

③⑦ 初元五年 初元五年八月丙午、甲渠鄣候告尉、謂士吏

三二一・一五C（破）

など枚擧に暇がないが、候官出土簡の場合、明らかに多くの事例で甲渠候官の長官である鄣候が尉に命じていることがわかる。尉に「告」する人物は鄣候である蓋然性が高い。また、簡③⑤では、都尉府が格下の候官に向けて「移」字を用いていることから大庭説には従い難い。簡③⑤は竺沙説に従い、まず肩水都尉府から肩水候官に送達され、肩水候官の長官が候官所屬の尉を通して、縣以下の吏に傳達したと解釋する方が適切であろう。<sup>(28)</sup>

以上のように、縣に裁判や官吏の新規補充を依頼する際、都尉府は縣に直接命令を下さずに、候官を経由して縣に要請している事例が確かに存在する。<sup>(29)</sup>このことは、簡⑩のような軍事・警察に關する案件で、都尉府が自身の系統下にない機關にも命令を下すという状況とは乖離する事例である。都尉府は一方的に縣に命令を下して行政事務を處理させるような對應を取っていたわけではない。必要であれば、候官を窓口にして縣に「依頼」する形式を取ることがあったのである。<sup>(30)</sup>

ここで、前漢後半期の西北邊郡の狀勢をみると、『漢書』匈奴傳下に、「初め、北邊 宣帝より以來、數世 煙火の警を見ず、人民熾盛にして、牛馬野に布し」とあり、匈奴との關係は安定しており、<sup>(31)</sup>宣帝期以降、軍事關係で都尉府が自身の管轄下に命令を發する機會が減少し、都尉府が縣に命令を下すような縣に對する統制は弱まったと考えられる。

さらに、裘錫圭氏が指摘するように、元帝期以降に農政機構はすでに衰退していたと思われ（裘一九九七、四五三頁）、

③⑧ 地節三年、四月丁亥朔丁亥、將兵護民田官居延都尉

□庫守丞漢書言、戍卒且罷、當豫繕治車、毋材木

EPT五八・四三

に見られるような、管轄區域の諸機關や吏民の守護者たる「將兵護民田官（兵を將いて民や田官を護る）」の稱號を持つ居延都尉府の重要性が、田官を含む農政機構の衰亡により相對的に低下していったと想定される。<sup>(32)</sup>邊境に平和が訪れたのちも軍事機構は存在し續けたが、邊境が安定したが故に、都尉府を中核とする前線に位置する軍事機關の重要性及び軍事機構と系統を異にする縣に對する統制力は、匈奴と交戦していた宣帝期以前と比べ相對的に低下せざるを得なかったのである。つまり、都尉府よりの軍事命令が減少したことにより、都尉府の縣に對する關與が、行政事案に限られてゆき、<sup>(33)</sup>候官を経由しての要請という形式を多くとっていくのは、佐原氏の述べるような行政の慣行という側面だけでなく、邊境情勢の安定に伴う、前漢後半期における邊郡都尉府の重要性の相對的低下という時代背景も重視せねばなるまい。

最後に、前漢時代の都尉府と縣の關係及び河西地方の統治の安定について總括しておこう。前漢時代の河西地方の統治の安定については、『漢書』地理志下に、

邊塞を保ち、二千石之を治め、咸な兵馬を以て務めと爲す。酒禮の會、上下通じ、吏民相い親しむ。是を以て其の俗風雨時に節たり、穀の糴常に賤く、盜賊少なく、和氣の應有りて、内郡より賢る。此の政寛厚にして、吏の苛刻せざるの致す所なり。

とある。本節で考察してきたように、行政に關する案件で、都尉府は候官を通して縣に行政業務を依頼する事例が存在した。しかも宣帝期に匈奴との和平が達成されてから、都尉府は軍事的命令を自身と系統の異なる他機關に下さなくなり、都尉府は相對的にその統制力を減じざるを得なかった。鎌田氏の考察と異なり、前漢後半期の河西地方において都尉府が縣を領することにはならなかったのである。むしろ、軍事機構が管轄區の軍事防衛に責任を持ち、縣が軍事機構の行政を補助するという、相互補完的な關係がより邊郡の安定を強固たらしめていたと總括することができよう。<sup>(34)</sup>

## 第二節 前漢河西地方の安定化の要因

屬國という行政区分は武帝期に發展した制度である。武帝の元狩年間に匈奴の昆邪王が漢に歸屬して五屬國を設置し、そこに投降した匈奴の人びとを分屬させた。『漢書』霍去病傳に、「乃ち降者を邊五郡の故塞外に分處し、而して皆な河南に在り、其の故俗に因りて屬國と爲す」とあり、顏師古は「其の本國の俗を改めずして漢に屬す。故に屬國と號す」と注釋する。つまり、屬國とは歸屬した異民族が自らの習俗を變えずに漢の統治に服することが可能な行政區域のことである。従來、張掖郡に存在した屬國はこの元狩年間の五屬國には含まれないとされる。ただし、張掖郡の屬國の存在は『續漢書』郡國志五に、「張掖屬國、武帝屬國都尉を置き、以て蠻夷の降者を主る」とあるように、武帝期にすでに確認できる。<sup>(35)</sup> ところで、張掖郡には、屬國がいくつ存在したのであろうか。陳夢家氏は、「下領武校居延屬國部農都尉縣官承書」(六五・一八)や「敢告居延屬國部」(二二六・二)の簡文から、「居延屬國」の存在を指摘する(陳一九八〇、四〇～四一頁)。しかし、この陳氏の見解には裘錫圭氏の批判が存在する。裘氏の主張を簡単に整理すると、居延は都尉が管轄する行政區域であり、同時に複數の都尉が存在することは考え難く、簡六五・一八は、「下領武校居延、屬國、部、農都尉」と標點すべきで、張掖郡の居延都尉、屬國都尉、部都尉と農都尉を指しており、部都尉の中で特に居延都尉に言及しているのは、その地位が特に重要であつたためとする(裘一九九二、五八一頁)。もし、陳氏の見解のように居延に屬國が存在していたのであれば、居延屬國との活發な連絡が行われていたはずであるが、出土簡からはそのような狀況を全く窺うことはできない。裘氏の見解に従うべきであろう。<sup>(36)</sup> 張掖郡には、張掖屬國の一屬國しか存在しなかったとして問題なからう。

また、屬國の官制は、『漢書』百官公卿表上によると、

典屬國は、秦官、蠻夷の降者を掌る。武帝の元狩三(前一二〇)年に昆邪王降りて、復た屬國を増し、都尉・丞・候・千人を置く。屬官、九譯令。成帝の河平元(前二八)年に省きて大鴻臚に并す。



とあり、成帝期まで中央の典屬國が屬國都尉以下の官屬を統轄し、成帝の河平元年以降に大鴻臚がそれらの官屬を統轄したとする。鎌田氏は、屬國都尉の任務として屬國內の異民族が故郷そのままの生活を営むのを監視するというような消極的な治民を行い、その主な職掌は投降胡騎を率いて防衛にあたることとする（鎌田一九六二、三三三頁）。

ただし、屬國都尉の統屬關係について大庭脩氏が復元した肩水候官出土の所謂「元康五年詔書冊」の一部に、

〔39〕三月丙午、張掖長史延行大守事、肩水倉長湯兼行丞事、下屬國・農・部都尉・小府・縣官。承書從事、下當用者。如詔書。守屬宗、助府佐定

一〇・三三一（地）

【三月二四日、張掖郡長史の延が大守の事務を代行し、肩水倉長の湯は兼ねて丞の事務を代行し、屬國・農・部都尉・小府・縣官に下す。文書を受け取ればしかるべく處理し、擔當者に下すように。如詔書。守屬の宗、助府佐の定】

とあり、張掖太守府が直接は統屬關係のない張掖屬國に命令を下している。このことから、屬國は建前としては典屬國の統屬下にあるが、實際は所在地の郡太守府の命令も受けていたことが了解されよう。<sup>(37)</sup>

屬國の役割についていえば、屬國の騎兵は都尉府に派遣されていたようで、

〔40〕□ 以食斥候胡騎二人五月盡 □

一八二・七（大）

〔41〕□ 屬國胡騎兵馬名籍

五二一・三五B（大）

と、肩水都尉府から屬國の騎兵に關係する簿籍が出土している。もちろん、屬國が邊郡の防衛力の強化に一役買い「夷を以て夷を制す」という軍事的役割を期待されていたことは想像に難くない。ただし、屬國の役割は對外防衛だけであつたのであろうか。

邊郡の行政制度の一側面として、鎌田氏は、『後漢書』西南夷傳に、

冉駹夷なる者は、武帝の開く所。元鼎六（前一二）年、以て汶山郡と爲す。地節三（前六七）年に至りて、夷人は郡を立てて賦重しと以いて、宣帝乃ち省きて蜀郡に并せて北部都尉と爲す。

とあるため、部都尉の管轄地には本郡よりも賦課が軽く歸屬した異民族に適った行政が布かれていたとする（鎌田一九六二、三三〇頁）。では、屬國都尉の管轄地である屬國は、部都尉と同様、より異民族に適した行政区域なのであろうか。

たとえば、宣帝期の神爵二（前六〇）年五月に一年がかりで西羌の叛亂を鎮壓したのち、戦後處理として、「金城屬國を置き以て降羌を處らしむ」（『漢書』宣帝紀）とある。もともと郡の管轄下にあった西羌の叛亂に對する戦後處理として、新たに金城屬國の建設が選擇されている。また、漢帝國西南の珠厓郡では、元帝期に放棄されるまで繰り返し叛亂が起きていた。叛亂が頻發した背景に異民族が郡縣制に組み込まれ搾取されたことが挙げられる。<sup>(38)</sup>この二例から、屬國制度も部都尉管轄地と同様、通常の郡縣制よりも異民族に適った統治制度といえるであろう。金城屬國がその後、前漢一代を通じて叛亂を起こさなかったこともその傍證となしえよう。

以上のように、前漢時代の河西地方では、異民族を屬國制に組み込むことにより、軍事防衛上重要な戦力を得たばかりでなく、歸屬した異民族の叛亂も未然に防ぐ安全瓣ともなっていたのである。また、屬國で萬一叛亂が起きても他郡に波及することはなく鎮壓が容易であった。<sup>(39)</sup>王宗維氏が指摘しているように、屬國による統治は、歸屬した異民族を漢人を中心とする通常の農民と分けて別々に管理することにより、情勢を安定させることができたのである（王一九八三）。

では、このような邊郡に安定をもたらす屬國制度は邊郡統治制度の中でどのように位置づけることができるか。屬國制度の邊郡統治制度における位置附けに關して、渡邊信一郎氏によれば、武帝期の五屬國の屬國都尉に匈奴の首長が就いており、そうした匈奴首長層の封建は典屬國・大鴻臚との行政關係や郡縣制的統治形態とは別に、皇帝との直接的關係において封建的臣從關係を生み出し、この臣從關係のなかで漢帝國の對外防衛・侵攻の任務にあたった。そして前漢期の帝國編成は、邊境にあつては部都尉制と屬國制度、すなわち郡縣制と封建制との連携によつて維持されたとする（渡邊二〇一〇、一七八頁）。しかし、武帝期以降の屬國都尉には、たとえば、成帝期に酷吏張湯の曾孫の出が天水屬國都尉（『漢書』張湯傳）に、哀帝期に劉歆が安定屬國都尉（『漢書』楚元王傳）に就任しており、匈奴の首長が武帝期以降も屬國都尉に

就任し續けたわけではない。<sup>(40)</sup>また、武帝期に封建された匈奴の諸侯のほとんどが早期に取り潰されていることから、こうした封建制が維持できたとは考え難く、武帝期以降の前漢後半期を通じて屬國制度が封建制であったとする渡邊氏の見解には首肯できない。<sup>(41)</sup>簡<sup>39</sup>で郡太守が屬國都尉にも命令を下していることから、屬國制度とは異民族を圓滑に統治するための郡制度に準じた形態とする方がより適切であろう。

最後に、前漢の河西地域に安定をもたらした要因を總括しておこう。張掖郡には通常の郡制と郡制の一形態としての屬國制が並置されていた。通常の郡制度の中でも、居延・肩水兩地域には部都尉が置かれていた。ただし、都尉府は行政事務の多くを候官に委任しており、縣との交渉も多く候官が窓口となっていた。宣帝期以降の邊郡情勢の安定を承けて、都尉府の重要性が相對的に低下し、都尉府が縣を領するという事態には前漢後半期を通じて發展しなかった。その結果、都尉府が縣を領さずに自身の管轄區の軍事防衛に責任を持ち、縣が軍事機構の行政を補助するという相互補完的な關係が統治の安定化に大きく寄與した。また、河西地方には大勢の歸屬した異民族が存在していたが、屬國制度を布くことで、異民族を圓滑に統治することに成功した。加えて、中央政府もまた邊郡には特に注意を拂っていた。武帝期には、新たに歸屬した異民族の人びとのために武帝が食膳を減らすなどして皇帝の倉庫の食糧を邊郡に送ったり（『漢書』食貨志下）、また、頻繁に異民族の侵攻を被る邊郡に對してその費用を供給する金布令甲も制定されており（『漢書』蕭望之傳）、邊郡統治を安定化させる努力を中央政府も拂っていた。前漢の河西地方は中央政府からの援助を受けながら、郡太守のもと、都尉府が縣を統屬下に置かない郡制と歸屬した異民族を安定的に統治することができる屬國制を併用し、それぞれ別々に統治するという實に巧妙な統治制度を驅使して至上の安定期を現出させていたのである。

## おわりに

以上、三章にわたり前漢時代の居延地方を中心とした邊郡都尉府の職掌と邊郡統治制度の考證を行ってきた。本稿で得

られた知見を總括しておこう。

第一に、軍事的職掌について。邊郡都尉府は異民族との前線に治所を置くことから、異民族の侵入に對處することはもちろんのこと、兵器・鐵器管理や吏民の逃亡防止をも職掌としていた。そのため、都尉府は軍事・警察關係の事柄であるならば自身の統屬下でない諸官署にも命令を下すことができた。ただし、都尉府は常に太守府の統率下にあった。部都尉は太守の統率のもと自身の管轄區から動かず、自身の管轄下を安定させることが最大の任務であった。また、部都尉は邊郡において複數存在したことから、吏卒の掌握という都尉の最も基本的な軍事的職掌は各都尉府で分割され、必然的に個々の都尉の權限の弱體・縮小化をもたらすことになった。つまり、太守の專制を牽制する都尉の任務の一つが内郡と違ひ邊郡では全く機能していなかったといえよう。

第二に、行政的職掌について。文書行政の體制下の都尉府は、各事案の最終的な決定權は保持するものの、實際に候官以下の機關に關わる行政の實務の多くを候官に委任しており、部燧の守御器關係の查察が中心である行塞を除けば、多くの場合文書の中でしか候官と候官以下の機關の情報を知り得なかった。候官こそが候官と候官以下の機關・吏卒に關する行政の實務を擔つたのである。この點で、邊郡の都尉府はより軍事・監察方面に特化した機關であるといえよう。

第三に、都尉府の職掌と邊郡統治制度について。まず、都尉府が縣を領さなかつた理由は、都尉府が行政を候官に擔當させるのと同様に行政の慣行という側面もあるが、宣帝期以降に匈奴と和平が達成され、元帝期以降には都尉府の防衛對象の一つである農政機構が衰退し、相對的に都尉府の重要性が低下していったためである。そして、都尉府が自身の管轄區の軍事防衛に専念し、縣が軍事機構の行政を補助するという、相互補完的な關係がより邊郡の安定を強固たらしめていた。加えて、河西地方に多數存在していた歸屬した異民族に對する統治制度として屬國制度が導入され、邊郡情勢の安定化に成功した。前漢の河西地方は、中央政府からの援助を受けながら、郡太守のもと、都尉府が縣政に關與しない郡制と屬國制を併用しそれぞれ個々別々に分割統治するという統治制度を採用し、西北邊郡の狀態を安定化させたのである。

このように、前漢後半期には河西地方の状況は非常に安定していたが、王莽期・竇融期を経て、後漢時代には河西統治に變化が見える。早くも光武帝期には、班彪が河西統治の潜在的な危機に對して警鐘を鳴らしている（『後漢書』西羌傳）。また、次代の明帝期の末年に、河西地方は、「城門晝にも閉ざす」（『後漢書』班超傳）という惨状を呈するようになる。故このような變化が起きたのか。それは、以後の課題としたい。

## 参考文献

### 【日文】 五〇音順

- 市川任三 一九六五 『前漢に於ける張掖郡の都尉に就いて』、『東洋文化研究所紀要』六。  
 一 九六八 『前漢邊郡都尉考』、『立正大學教養學部紀要』第二號。  
 鵜飼昌男 一九八四 『居延漢簡にみえる文書の遞傳について』、『史泉』第六〇號。  
 大庭 脩 一九七九 『木簡』、學生社。  
 一九八二 『秦漢法制史の研究』、創文社。  
 鎌田重雄 一九六二 『秦漢政治制度の研究』、日本學術振興會。  
 紙屋正和 二〇〇九 『漢時代における郡縣制の展開』、朋友書店。  
 佐原康夫 一九九七 『居延漢簡に見える官吏の處罰』、『東洋史研究』第五六卷第三號。  
 滋賀 秀三 二〇〇三 『中國法制史論集・法典と刑罰』、創文社。  
 角谷常子 一九九三 『漢代居延における軍政系統と縣との關わりについて』、『史林』第七六卷第一號。  
 高村武幸 二〇〇八 『漢代の地方官吏と地域社會』、汲古書院。  
 竺沙雅章 二〇〇三 『居延漢簡中の社文書』、『富谷至編『邊境出土木簡の研究』、朋友書店、所收。  
 富谷至編 二〇〇六 『江陵張家山二四七號墓出土漢律令の研究』（譯注編）、朋友書店。  
 富谷 至 二〇一〇 『文書行政の漢帝國・木簡・竹簡の時代』、名古屋大學出版會。  
 松田壽男 一九八七 『東西文化の交流Ⅱ』（松田壽男著作集第四卷）、六興出版。  
 榎山 明 二〇〇一 『漢代エチナ＝オアシスにおける開發と防衛線の展開』、『富谷至編『流沙出土の文字史料——樓蘭・尼雅出土史』

料を中心に、京都大學出版會、所收。

二〇〇六

『中國古代訴訟制度の研究』、京都大學學術出版會。

森谷一樹二〇一一

『前漢～北朝時代の黑河流域——農業開發と人々の移動』、中尾正義編『オアシス地域の歴史と環境…黒河が語るヒトと自然の二〇〇〇年』。

永田英正一九八九

『居延漢簡の研究』、同朋舍出版。

一九九三

『新居延漢簡の概観』、『東方學』第八五輯。

渡邊信一郎二〇一〇

『中國古代の財政と國家』、汲古書院。

【中文】 拼音順

陳夢家一九八〇

『漢簡綴述』、中華書局。

紀安諾二〇〇二

『漢代張掖都尉考』、『簡牘學研究』第三輯。

均和・劉軍一九九七

『漢簡學書與行塞考』、『簡牘學研究』第二輯。

李并成一九九五

『漢張掖屬國考』、『西北民族研究』一九九五年第二期。

李均明一九九九

『初學錄』、蘭臺出版社。

二〇〇九

『秦漢簡牘文書分類輯解』、文物出版社。

劉光華一九八八

『西漢邊郡屯田的管理系統及其有關問題』、『敦煌學輯刊』一九八八年第一、二期。

裘錫圭一九九二

『古文字論集』、中華書局。

一九九七

『從出土文字史料看秦和西漢時代官有農田的經營』、臧振華編『中國考古學與歷史學之整合研究』(上)、中央研究院歷史語言研究所。

王宗維一九八三

『漢代的屬國』、『文史』一九八三年輯。

肖化一九八三

『略談廬水胡的族源』、『西北師範學院學報』一九八三年第二期。

嚴耕望一九六一

『秦漢地方行政制度』、『中國地方行政制度史』上編、卷上、中央研究院歷史語言研究所。

## 註

(1) 農政系統の諸機關に關しては、裴錫圭氏の研究が擧げられる。本文中の系統圖も基本的に裴氏の研究に従っている。ただし、裴氏は、居延農・驛馬農が行政的に農都尉に屬するの中央の大司農に直屬するの決定でなく、さらに部都尉に屬する可能性も完全には排除できないとする（裴一九九七、四四四・四四九・四五二・四五三頁）。しかし、本稿では、靺山明氏に従い、居延農・驛馬農は農都尉府の管轄下にあるものとする（靺山二〇〇一、四六一頁）。また、分部とは、「第某長」もしくは「第某丞」を長官とする農政機關である。分部の丞が長の次官ではなく、長と同等級の分部の長官であることは、劉光華氏により論證されている（劉光華一九八八）。

(2) 『史記』汲黯列傳の『史記集解』が引用する應劭注には、「律、胡市、吏民不得持兵器出關」とあり鐵の出關禁止措置がない。ただし、居延漢簡中の、

第五丞別田令史信、元鳳五年四月鐵器出入集簿

三一〇・一九（大）

などのように、鐵も管理されていたことから、『漢書』師古注が引用する應劭注がより適切であろう。

(3) 解釋は、富谷編二〇〇六（五二―五四頁）を参照した。

(4) 前漢初期の張家山二年律令と現在考察の對象としている武帝以後の前漢後半期では、少なくとも百年以上の時間の開きがある。ただし、滋賀秀三氏が指摘するように、漢代の律令は基本的に皇帝の命令である詔が淵源であり、有名

無實化しても、建前として後の詔によって廢止されるか、後の詔と矛盾しない限り、いつまでも效力を有するものであった（滋賀二〇〇三、四一八頁）。

(5) 後述の簡①で肩水都尉府が農政機關に命令を下していることから明らかである。

(6) 近年では、富谷氏が指摘している（富谷二〇一〇、三三〇―三三一頁）。

(7) ここで、張掖都尉の位置づけを確認しておく。張掖都尉に關して、以下のように學說を整理しておく。

(1) 張掖都尉＝肩水都尉（市川一九六五）。

(2) 張掖都尉も郡名を冠した部都尉（裴一九九七、四三八頁注四〇）。

(3) 一郡全てを管轄し、部都尉が軍官であるのと比べ、より郡内の警官或いは憲兵の長官という性質が強い都尉（紀二〇二）。

すでに述べてきたように、部都尉は自身の管轄區域の平穩を保つことを最大の職掌としており、決して部都尉に警察的職掌がないわけではない。さらに、假に張掖都尉が一郡全てを管轄していたのなら、居延・肩水地區を統べる居延・肩水部都尉と何らかの統屬關係を想定しなければならぬが、少なくとも現存の居延漢簡からは、張掖都尉と兩部都尉の統屬關係を示唆するような簡牘は見いだせない。

この點で紀氏の解釋には従い得ない。市川氏・裴氏に従い、張掖都尉もまた部都尉と考えるべきであろう。ただし、張

掖都尉が肩水都尉と同じかどうかは確言できない。

- (8) 『漢官舊儀』に、「元朔三年以上郡・西河爲萬騎太守。月俸二萬。綏和元年、省大郡萬騎員秩、以二千石居」とあり、邊郡太守が強力な軍事力を有したことが記されている。

- (9) 簡番號は、富谷氏に従い、「雲夢睡虎地秦墓」編寫組『雲夢睡虎地秦墓』(文物出版社、一九八二)に依據する。  
(10) 裘錫圭氏は、舉書を「問題點を舉出した文書」と定義する(裘一九九二、五八六頁)。

- (11) 李均明氏によれば、過書刺とは「傳行記錄」のことである。より正確に言えば、過書とは「通過した郵書」のこと、刺とは「狀況を報告する文書の一形式」とする。そして過書刺と郵書刺は全く同じものとする。また、郵書課は通常の過書刺の文言に加えて「中程(規定通り)」という點檢の評語が簡末に記された文書であるとする(李一九九九、五八・五九頁、一〇九頁)。

- (12) 永田氏は、簡⑬中の「府都吏」を「都尉府の大吏」と解し(永田一九八九、三九五頁)、裘氏は、「都尉府の都吏」と解し(裘一九九二、五八七頁)、兩者とも表現は異なるが、いずれも都尉府に所屬する吏によって行塞舉が行われたと解釋している。

- (13) 鵜飼昌男氏の綴合に従う。氏によれば、この簡は文書遞送の遅延を問責した冊書の一部である(鵜飼一九八四)。本稿では、この簡に關して基本的に裘錫圭氏の解釋に依據する。裘氏は、「邸」を「抵」と讀み替え、「須」を「待つ」の意味で解釋している(裘一九九二、六一四頁)。ま

た、「忘」を「妄」と讀み替えるのは李均明氏の解釋に従う(李一九九九、六六頁)。なお、叔山氏も裘氏の解釋によっているが、鵜飼氏の綴合を採用せず、裘氏の「邸」を「抵」と讀み替える解釋も採用していないため細部で本稿と解釋が異なる(叔山二〇〇六、一四四頁)。

- (14) 佐原氏は、懲罰勞働のような輕微な處分の決定も、都尉府の承認を得て候官において下されたとする(佐原一九九七)。なお、候官以下の吏に處罰を執行するのは本文中に舉げた史料からも間違いない候官の職務である。しかし、處罰の輕重の決定が一律に都尉府の權限であったかは、現時點では斷言できない。本文中に舉げた史料では候官が決定したとも解釋しうる。候官獨自に處罰を決定し、都尉府に處罰の結果の事後報告を行った場合もあるのではない。今後の研究を待ちたい。

- (15) その他の都尉府の行塞舉には、吏卒の不在署(持ち場から離れること)に關する舉書が存在する。たとえば、

第十四隧卒犯賽不在署。謹驗問第十守候長士吏褒、候史褒辭曰、十二月五日遣賽□ EPT五九・六八

吞遠隧卒賈良不在署。謹驗問吞遠候長譚兼候史吞北隧

長褒、辭曰、十二月五日良 EPT五九・六九

などが舉げられる。均和・劉軍氏によれば、「不在署」の記録は、府都吏や千人などが巡視・檢査する際に形成されたものとする(均・劉一九九七)。ただし、府都吏が指摘しているのは、吏卒が持ち場に就いているか離れているかということのみであり、候官が具體的な調査を行っていた



ことは、上記の簡の「謹驗問」からも了解されよう。

- (16) 薛宣傳中の「府」は、「太守府」を指す一般名詞であり、太守府が縣以下の吏民に對して處罰を執行しないことは特に薛宣の場合に限定されるわけではなからう。例外として、尹翁歸が東海太守になり、縣の姦邪の案件を直々に裁き、縣の令長に處罰を委ねなかつた事例が挙げられる（『漢書』尹翁歸傳）。しかし、史書に特筆される程なのでやはり例外と見なす方が妥當である。

- (17) 文中の「上府」とは顏師古の注では「所屬の府」とあり、縣が上級機關に報告する場合、「上府」とは太守府を指す。  
(18) 紙屋正和氏は、前漢後半期には、郡國による監察體制はある程度整備されていたが、縣・道から提出された上計簿の審査や考課などの職務は十全なものとはいえず、郡・國の諸部局がそれに對應する縣・道の諸部局と職務上、組織的で直接的な關係をもつということが缺如していたと想定する。（紙屋二〇〇九、五五〇～五五一頁）

- (19) 裁判に關して、叔山氏によれば、府が下級機關に審理と判決原案の作成を附託することは、内郡・邊郡に共通するとする（叔山二〇〇六、一五一頁）。ただし、本文中で挙げた處罰の事例のように、裁判だけの事例には止まらず、文書行政の特質と考えられるのではないか。

- (20) 前漢後半期の著名な簿籍の改竄の事例として、田延年が運送費を水増しして三千萬錢を横領した事例（『漢書』酷吏田延年傳）がある。

- (21) さらに、嚴氏は、『後漢書』西南夷傳の「沈黎郡」至天

漢四年、并蜀爲西部、置兩都尉、一居旄牛、主徼外夷。一居青衣、主漢人」を根據に、前漢時代にすでに部都尉が縣を領していたとする（嚴一九六一、一六〇頁）。

- (22) 李并成氏は、肖化氏の見解を發展させ、張掖屬國の治所を現在の張掖市から東南に八〇km離れた祁連山北嶺の民樂縣永固鄉八卦營村の西方の古城跡、八卦營古城に比定する（李一九九五）

- (23) 森谷一樹氏は、居延漢簡の中からは、漢入植以前から居延オアシスにて暮らしていた先住民（異民族）の姿がほとんど見えないとしながらも、現地の實地調査と衛星寫眞の檢證から、先住民は農耕を行った痕跡のない居延オアシス南西部の一區畫に居住していたと推論する（森谷二〇一一、三三頁）。ただし、本稿で述べているように、やはり大部分の異民族の歸屬者は屬國に編入されたと思しい。

- (24) 同一の探方（試掘坑）出土の簡のうち、有紀年簡は合計六五簡存在する。内譯は、永田氏によると、昭帝期一簡、宣帝期八簡、元帝期二三簡、成帝期三一簡、王莽期二簡である（永田一九九三）。宣・元・成帝期のものである蓋然性が高いことが了解されよう。なお、裘氏もこの探方出土簡の多くが宣・元・成帝期に屬するとする（裘一九九七、四三七頁）。

- (25) 同様の簡として、EPT五二・一四二などが挙げられる。王莽期の簡ではあるが、EPT五九・一六〇も根據に挙げることができよう。

- (26) 都尉府も裁判に關與することは、衛宏『漢官舊儀』下に

「漢承秦郡、置太守、治民斷獄。都尉治獄、都尉治盜賊甲卒兵馬」とあることからわかり、現時点では、軍事機構に關する全ての裁判を縣に依頼しているとは斷言できないため、「縣に依頼する場合」と幅を持たせておく。

(27) 王莽簡の特徴が看取できない上、紀氏は肩水都尉府は前漢末年に除かれたとする(紀二〇〇二)。

(28) 文書傳達経路において、鷹取祐司氏は、本稿の解釋と異なり大庭氏の説の方が正しいとする。しかし、もし大庭説に従うと、以下の簡のような、ともに一齊送達を示す文言である「下」と「告：謂：」の區別をどのように説明すればよいのであろうか。

□□武賢、司馬如昌行長史事、千人武彊行承事、敢告都尉卒人、謂縣、寫重如

□卒人／守卒史穉守屬奉世 EPT五一・二〇二

三月己丑、張掖庫宰崇以近秩次行大尹文書事・長史承下部大尉(＝部都尉)・官・縣、承書從事、下當用者。有犯者輒言。如詔。書到言。兼掾義・兼史曲・書吏遷金。 EPT五九・一六〇

なるほど、鷹取氏は、「下」は詔書の場合に用いられ、「告」「謂」は詔書以外の下達文書に用いられたとして、兩者を區別する。鷹取氏が詔書の例として挙げた簡には、閏月庚申、肩水士吏横以私印行候事、下尉・候長。承書從事下

當用者、如詔書。／令史得 一〇・三一(地)

八月戊辰、張掖居延城司馬武、以近秩次行都尉文書事、

以居延倉長印封。丞郡、下官・縣、承書從事、下

當用者。上赦者人數罪別之、如詔書。書到言。毋出月

廿八。 據陽守屬恭書佐況 EPT二二・六八

などがある。鷹取氏は、おそらく「如詔書」の文言の存在を詔書の目印と考えているのであろう。しかし、富谷氏が指摘するように、「如詔書」は書き止めの慣用句である(富谷二〇一、一七五―一七六頁)。書き止めの慣用句であることから、「如詔書」と文書にあっても必ずしも詔書であるとは限らない。また、李均明氏も「下」を「下傳、下達」と特段詔書に限って用いられる下達文言とは考えていない(李均明二〇〇九、一四一頁)。

よって鷹取氏が想定するような、詔書には「下」が用いられ、詔書以外の文書に「告」「謂」が用いられるという前提は、「如詔書」の文言の有無により、詔書か詔書でないかを判別している限り従い難い。つまり、「下」も「告：謂：」もともに通常の下達文書にも用いられるならば、兩者を區別できない大庭説は成り立ち難いのである。

また、鷹取氏は、肩水金關出土の「甘露二年御史書」と敦煌懸泉置出土の「調史監巡要置冊」を挙げ、大庭説の補強を圖っている。しかし、前者は裘錫圭氏により、「書法は雜で、内容には削除・節略が存在し、文字は當然、破城子出土の殘牘の信賴できるものには及ばない」と指摘されており(裘一九九二、六二二頁)、その記載内容を信じて文書の傳達経路を確定することは危険である。また、後者は鷹取氏も注で觸れているように、出土時の編綴が文書送

達時の編綴とは異なる以上、文書の傳達経路を確定するための決定的な根拠とはなし難い。

(29) 建昭元年九月丙申朔乙卯、鑠

居延都尉府令居延驗問收責

敢言之。謹移吏缺如牒。唯府令聞田除補。敢言之。

七二・一〇(破)  
EPT五九・三九

などのように、行政事例で都尉府が縣に命令を下していると思しい事例もある。ただし、いずれも候官から出土しており、候官が窓口になっている可能性もなお排除できない。都尉府による縣への命令の状況についてはまだ議論の餘地があろう。

(30) 縣と同ランクの候官から依頼された場合、縣は候官の依頼を斷る事もあったようである。居延新簡中には、

阜單衣毋鞍馬、不文史、詰責駿對曰、前爲縣校弟子未

賞爲吏、貧困毋以具阜單衣

冠鞍馬。謹案、尉史給官曹治簿書、府官繇使乘邊候望爲百姓潘幣、縣不肯除。

EPT五九・五八

と縣が軍事機構の官吏を除するのを斷つた例が見える。この簡は解釋が困難だが、ひとまず角谷氏の解釋に従っておく(角谷一九九三)。縣が候官の依頼を斷っているのは、現時點でこの一例のみであるが、候官からの「依頼」の場合、斷る事ができたようである。ただし、一例のみであるため、なお慎重に判斷する必要がある。

(31) 高村武幸氏は、有紀年簡を検討し、宣帝期に呼韓邪單于との和平を達成して以降、異民族との武力衝突も確認でき

ないとする(高村二〇〇八、三七〇頁)。

(32) 「將兵護民田官」の稱號が附されている簡は非常に數が少ないものの、宣帝期を降るものは現段階では發見されていない。高村氏の論考を参照されたい(高村二〇〇八、三五頁)。

(33) 佐原氏は、都尉府を含む軍事機構と縣の關係について、都尉府と縣に官制上の上下關係はないものの、軍事機構から縣に業務の處理が委任されることがあるのは、都尉府の機構において、配下の候官では處理できぬ行政實務が現在で言えば「機關委任事務」として、縣に送られていたとする(佐原一九九七)。

(34) 高村氏は、本稿とは位置づけが異なるものの、河西地方の住民の安定した經濟力と邊境軍事機構を中心とした官僚組織と河西地域の相互依存的な關係から、『漢書』地理志の記述を肯定的に捉えている(高村二〇〇八、四五三頁)。

(35) 陳夢家氏が指摘するように、瓦因托尼出土簡に、「出麋卅三石二斗 征和三年八月戊戌朔己未、第二亭長舒付屬國百長・千長」(一四八・一、一四八・四二)とあり、武帝期の征和年間には、すでに屬國が存在していたことは疑いない(陳一九八〇、四一頁)。

(36) 紀氏も筆者とはほぼ同じ結論を下す(紀二〇〇二)。

(37) 市川氏も屬國都尉は太守の隸下に在り、典屬國との關係は名義的なものに止まったとする(市川一九六八)。

(38) 『後漢書』西南夷傳「珠崖太守會稽孫幸調廣幅布獻之、蠻不堪役、遂攻郡殺幸。幸子約合率善人還復破之、自領郡

事、討撃餘黨、連年乃平。豹遣使封還印綬、上書言狀、制詔即以豹爲珠崖太守。威政大行、獻命歲至。中國貪其珍賂、漸相侵侮、故率數歲一反。元帝初元三年、遂罷之。凡立郡六十五歲」。

- (39) 前漢では、二例のみ屬國の叛亂が確認できる。『漢書』馮奉世傳に、「元帝即位、爲執金吾。上郡屬國歸義降胡萬餘人反去。初、昭帝末、西河屬國胡伊儻若王亦將衆數千人畔、奉世輒持節將兵追撃」とある。いずれも、他郡を巻き込むような大事には至っていない。王先謙『漢書補注』に引用される齊召南の注によると、西河屬國は宣帝の五鳳四（前五四）年に初めて設置されたとし、昭帝は宣帝の誤りとする。従うべきであろう。

- (40) そのほか、元帝期には馮奉世の息子の立が五原屬國都尉に（『漢書』馮奉世傳）、哀帝期には王莽の從弟の邑が西河屬國都尉（『漢書』何武傳）に、班固の祖父の釋が西河屬國都尉（『漢書』敘傳）に、就任している事例なども挙げられる。

- (41) 『漢書』景武昭宣元成功臣表によれば、武帝期に封建された匈奴の諸侯は二五例数えられるが、そのうち、昭帝期に取り潰された衆利侯伊即軒、宣帝期に取り潰された下摩侯諱毒尼・河塞康侯烏黎・昆侯渠復桑、成帝期に取り潰された杜侯復陸支、取り潰し時期不明の開陵侯成婉の計六例を除き、その他の諸侯一九例が武帝期に取り潰されている。

# 【附記】

本稿は平成二三年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果の一部である。

# THE DUTIES OF THE OFFICE OF THE CHIEF COMMANDANT IN THE BORDER REGIONS AND THE SYSTEM OF RULE OF THE BORDER REGIONS

NOGUCHI Yu

This article elucidates an aspect of the system of rule over the borderlands in the latter half of the Former Han dynasty through a consideration of the duties of the office of chief commandant 都尉府 in terms of military and administrative operations in the border regions of the empire.

In the first section I confirm the military duties of the chief commandant. Given the fact that the office of the chief commandant was situated on the front-line with non-Han peoples, the duties of the commandant were not only to deal with incursions of foreign peoples but also to manage weapons and iron implements, and prevent the escape of officials and common people. For this reason, if the chief commandant was faced with matters that were military in nature or involved safeguarding the region, he could issue orders to various offices that were not military ones. However, the office of chief commandant was generally under the purview of the governor 太守, and his greatest duty was maintaining stability in his own jurisdiction.

In the second section I confirm the administrative duties of the chief commandant. In terms of administration, although the chief commandant held authority for the final decision-making on each matter, in fact, most of the actual operation of administrative offices concerned with military affairs below the *houguan*-level were left to the *houguan* 候官. And in many cases, the commandant first learned of the situation of military institutions under the *houguan* through the documents presented to him. It was indeed the *houguan* who shouldered the burden of the actual operation of the administrative offices concerned with military organizations. Thus we can say that the office of the chief commandants in border regions was an office that came to be characterized by both its military and supervisory functions.

In the third section, I clarify the system of rule in border regions and the main causes of the stability in northwestern border region during the latter half of the Former Han. Peace with the Xiongnu had been achieved from the reign of Emperor Xuan 宣帝. The offices concerned with agricultural administration, which chief commandant was charged with defending, were abolished from the time of Emper-

or Yuan 元帝, and the opportunity for the office of chief commandant to issue military orders to various offices that were not related to military institutions came to an end. Thus, in comparison to the period of warfare with the Xiongnu, importance of the office was relatively decreased. For that reason, contrary to the accepted theory, the prefecture 縣 was not placed under the jurisdiction of the office of chief commandant in the latter half of the Former Han dynasty. The chief commandant devoted his efforts to the defense of his own jurisdiction, and the fact that the prefecture assisted in the administration of offices related to military affairs created a mutually supporting relationship that stabilized the situation in the border areas. Moreover, dependent states were established as the system of rule over the many subject non-Han peoples who resided in the Hexi 河西 region, and the situation of the border regions was thereby further stabilized. The northwest border region during the latter half of the Former Han dynasty was under the rule of governors, who received assistance from the central government, and it was by employing a parallel system of rule that featured a provincial system in which the chief commandant did not interfere in the politics of the prefecture and a system of dependent states that the situation in the border regions was stabilized.

**THE YANGMING FACTION OF SCHOLAR-OFFICIALS AND  
THE POLITICS OF THE EARLY YEARS OF THE REIGN  
OF EMPEROR JIAJING: ON THE POLITICAL ETHICS  
OF THE YANGMING SCHOOL**

JIAO Kun

The accession of Emperor *Jiajing* 嘉靖 of China's Ming dynasty to the throne was accompanied by a controversy over the proper imperial rituals 大禮議. Chief Grand Secretary *Yang Tinghe* 楊廷和, who enjoyed the support of the majority of the court officials, requested that Emperor *Jiajing* recognize his uncle Emperor Hongzhi as his father. At the same time, Emperor *Jiajing* was also asked to treat his own father as his uncle. Deeply disturbed, Emperor *Jiajing* sought to reject *Yang's* request. With the support of *Zhang Cong* 張璁 and other junior officials, Emperor *Jiajing* succeeded in politically defeating *Yang Tinghe*.